



中村俊定文庫  
文庫 18  
979





Handwritten text on the top flap of the book cover, likely a title or chapter heading.

Handwritten text on the bottom flap of the book cover, likely a title or chapter heading.

清浄白花東門之菴をよまひいれ  
平の如くありてたしむるが如し

かしら  
みつかね  
お足のね

一 一 明之介





清浄白花をまじりて  
平らに敷き置きたるし  
白の如し

かしら身をせめてか  
しきりて  
子つがきねむるに  
たしきりて  
物元の如し  
たしきりて

つら明之癸卯春  
芭蕉百四忌  
法舎お湖南  
知任奄追  
呂正  
船譜席上

三月十日

床

翁肖像

大竹子





一 瓦燈

中央

香炉

青磁 香初着

供卓上

古金貝

右花

あのみ 花の池

文基

厚草 新造 斗をちり

視範 芝琳

新造

同

高松山 極楽寺 新造

重現 極楽寺

座香

小座

海老

惣也

花を 探出

柳

百地

高日能得百久宗通 卧央

巨例

穿より花吹流るる母此河

書如くれも書此も也るん

曉臺

又乙高 蹴鞠のまろに控する

卧央

十一日

於本有寺 楳法 柳河 園地 柳其坊

高日能得 恒意之文 信未白 梅之峯

高日能得 山水 高村 座香 小座

高日能得 百久宗通 佛仙 柳河 芝琳 高日能得 百久宗通 佛仙 柳河 芝琳

高日能得 柳河 芝琳 高日能得 柳河 芝琳



東風吹法むまがら乃さく系  
かやろいそ焼心うりのたのりよ  
曉臺  
佛仙

十日目 洛東於石山あき寺瑞雲正武佛借

床

書林凡日堂(館)のあり  
以上おん名久しよらぬのり

瓦焼

文臺

同

以杯石本新造

中央

香炉 香磁柳子

硯箱 昨代府給下邸把搦同

右苑

こまき  
花せこらるる屋台

重硯 青貝

府香 云々

中休懸

海産虫也 倒懸(梅樹) 隆允子

苑 花(こまき) 軒の箱 以古木入定瓦松造

能入箱 右りの 硯箱 挿折法既済

高目佛借石角 宗通 曉臺 柳子石也 智計

苑 花(こまき) 軒の箱 以古木入定瓦松造

高目佛借石角 宗通 曉臺 柳子石也 智計

剣のりなあら 春之 洞

十五日 佛借及洞なるあり







梅若大なる以年の積り度かきりせそ

儿草

十七日 梅若大 讀

梅若大 讀 梅若大 讀 梅若大 讀

供香 梅若大 供香 梅若大 供香

梅若大 梅若大 梅若大 梅若大

梅若大 梅若大 梅若大 梅若大

梅若大 梅若大 梅若大 梅若大

梅若大 梅若大 梅若大 梅若大

梅若大 梅若大 梅若大 梅若大

市之日 四明洞下 金福寺 於芭蕉菴 興行

梅若大 梅若大 梅若大 梅若大

梅若大 梅若大 梅若大 梅若大

梅若大 梅若大 梅若大 梅若大

北海坊 佛



言ふ巻のめし 舊縁遊梅のこゝろありけり

あられも縁ありありとありとひぬうつく 車化坊 菊東

そのこのそにふさぬのさむらう 春夜樓

月そのめしやりのこよかられらぬ 夜半露 兒童

花のあふ同大令 廿五村

やまのこみりけり 暁

そにせりあふ 暁

奉了扇舎の中句

扇月の夜ももちこせよ 暁

新秋月並巻の句

扇やひこから 暁

詠乃す書

こゝろもて 琴を

あま まりの

なま 菊東

せう 仲伝



あふかり集 後書

郷俗の風情の尾端の國に吹かすてゐるの  
の文藝の成りぬるの如き舊態の徒然なる  
人少れさるるおのえおとして身成さるる  
凡庸して部部ありて乃吹かすをかうして  
たよまらぬあつて其ころ勢を回して後して  
社説の大小は破れつゝとさるるのよすゝとさるる  
生じつゝとさるるはさるるなることと  
ありつゝとさるるはさるるは後廢名を以て後

造り出さるるあらはしむ水鏡の如く人の心  
徒屋の流るるはあつて其ころ勢を回して後して  
のさるるはさるるはさるるはさるるはさるる  
あつて其ころ勢を回して後して  
をさるるはさるるはさるるはさるるはさるる  
親の人のありしとや西京釋のたふ  
るあのをとらつて入新田の略に活用を  
たふすはさるるはさるるはさるるはさるる  
るはさるるはさるるはさるるはさるるはさるる



まふちよと時をさし東のからく日  
あけは月をさして谷をさして  
さしつゝさしつゝはさしつゝさしつゝ  
さしつゝ  
いふ初んも見よころぬ所を  
丁卯端月しめ又さめよさしつゝ

白くぬくさかきやあや  
其蹟は月空源の礼を  
いさゝらははは東あや

さうれ吉成はとよみこも家のり  
も亦めてさし 不肖 土謝白をさし  
さしつゝさしつゝさしつゝさしつゝ  
海峯から白波さしつゝさしつゝ  
さしつゝさしつゝさしつゝさしつゝ  
幸ひそや昔何の幸ひそやさめとさし  
師も今さあくあつたひぬさあれ月  
堂中さ席を設けて人々をさし  
もにさのさ蹟は礼拜してさしつゝ

後とさし



いかにらそをいそはあらよ  
高きやまをさかたのたれ  
地はさく細いくら谷裂え  
又うせの影のたぐ  
いかにらそをいそはあらよ  
さきにいそありあられ  
桶の底からりとぬぐえ  
あいらそをいそはあらよ

上朗  
朗  
朗  
朗  
朗  
朗

後角一伊賀の石切来遊して  
是あゝいそをいそはあらよ  
靴着のやそおろし下着  
いそと地場のきり帰る  
いそと牛お曲れ月代  
いそと柱こけのたれ  
いそとやあゝいそはあらよ  
いそと木加賀の湯よけり

朗  
朗  
朗  
朗  
朗  
朗



力愛る人よおまよふ花のりふ  
破れ泥障を陽をこしあ  
春の空を一時鵜飼の乃啼の鳴  
下ろすそらをこし戸を推る  
御座人同からぬよあぬやむ  
梅と空をくし何れも酒  
烟をゆるす柳涼く事多  
垣りもゆるあゆり  
光さす地と玉くこゆるそら

臺  
臺  
臺  
臺  
萬岱  
羅城  
岳  
輅

あま下向のちるき  
父を松舟と栢と強きや  
浮かせのるそに風のきく  
暮れぬ東の月にははるる  
秋のそらをこし戸を推る  
段で下り衣もあま身も  
月のそらをこし戸を推る  
秋のそらをこし戸を推る  
春のそらをこし戸を推る

同  
岱  
南  
科  
魁  
紀  
城  
青



木の下にけし給てはくく  
此の端に今も長閑や

白園  
非吟  
白園

木下しの刃に木葉は似る  
壁下よらそそあきの夜の日  
宿りらまをいかに辛らぬ  
莫儀清舟よりか  
夷ホよ古き如佳や強る  
極をこしそぬ人まをいほし

白園  
土朗  
徐英  
因  
朗

早崎の空をこえのくや  
町ゆれ申よそあつるに今月  
小腕を撥すそ射のそり流て  
人のとあしらねよ  
うまの御か買うらふ  
空賀の舟をかきる後

岳格  
土朗  
呂井  
格  
井

はそらそ  
極りて孫のそを

沙漠



松ははやく苦のきこく踏めて  
うさぎもくくよる白かすりり  
初秋の月をきこくひ羊山原  
老馬やしなま白萩のし  
七本乃鋒のさむすまきりし

曉之臺  
漢  
臺

信史さへ枯て解りし金うりし  
まの枝本にやる日お知  
なるまよき道山人のきり次て

蘭水  
曉臺

金工屏の松の古さくめこりし  
蒼もて啼きやれまきりし  
吟歌や細川の波もふつと  
庭角に杭瀬踏ひぬ  
倉をなす物まかきり月いさ  
まにかつとて挿しきり  
秋然し見えれ柱しきりあり  
花めれりゆりきり雨

信史  
曉臺  
青  
臺  
青  
臺  
五月



鶴のそと能光の浦はまきしん  
 河法苑後を埋し蓮子  
 他の子の老し年しを返りて  
 度のおりりくはく演焼  
 月の為し返の回阿しきり  
 わり子捨る一歳のころり牛  
 道徳の徳又粉する小僕也  
 そと移しむし名あるらぬ  
 青 臺 梅 阜 臺 青 阜 梅

そと庭のそとる目のかたけり  
 鶴のそとるかまらし  
 阜 梅

後つ藤りし者、藤をのり月次  
 市のおりりくはく埋大  
 字り人の鳥ついでり白梅に  
 雨しぬ草のり、鳥住あり  
 今承ぬはる者て字を記し  
 昆明 臺 明







白粥すゝる 折着乃や海  
かほむ 袖をぬきうけて 臺  
れと 情風破るつれあし  
うき風のよお吹玉は東の海  
物かかぬて 魚とくうり  
七世之切と 檀のやの神前まゝ 臺  
明智のうら 糸屋のなま 七女 毛  
月の衣われよ 遊をい思あり 臺

打ちあはれあさくらの風  
草儀理ありしおと 貝吹て 臺  
小舟をよめる 傍をなかり 毛  
そんまを十りも ありのあそり入  
夕げさのよ 深る矢物あり  
砂をよおのや ちまゝ 臺  
人も是つゝく 車をうり  
朝々より 神の鼓の音をいし 毛



栲の丈ちくく目ふ啼ゆるを  
吾家の牛をきこゆるむと初は量  
せんすへちの帰信ありしを  
あしゆ醍醐の菰の序見ゆ  
後ほけておく栲のうき板量

栲あしや早栲かしの略あり

十日比月のたえり栲の量ふ計之

庭の玄狐包の栲の量ふ計之

雲稗のさかしくもあはれ中の量

秋のさくさくしむの紅臥央  
うちあはれ鶴の頭よ月出て上朗  
淡の海よよをささん 素見  
すいよに都らりと初は量 央  
あのをちの夏の曙 兄



有とあるたとき、何となくの月  
 人もものゝけの家けかりりり  
 心もくると小竹もとれ米も  
 元てス〜山の中さ  
 梓らささつきらう弦をりて  
 月〜ち〜年のもろ〜  
 吹か〜吹水て枯れ花を  
 白園

舟の福吉

木か〜〜〜麻也吹ら〜破戸を止周  
 世に儀のすま〜〜〜の薨  
 幼子に〜水中にひや春の雨 上朗  
 夫りれ雨〜〜〜押人〜 昆明  
 晴〜や〜〜〜足跡 昇平  
 昔〜子〜人の胡〜月の影 白園  
 夕〜や〜〜〜雨 郭庵

也田すま

郭庵















咽喉を病む患あれんを保善長と  
加へせざる事なりと云ふ  
執門と扁額とてト昇るは  
才方しりたありしりし業見くま  
風後とて一かあるは五周り今  
所として國に降るは雨を  
や月乃十日以内の喉の  
倍して食道を丸くして物通  
倍して食道を丸くして物通

カラメエタタラツクフルクスミナシタニハリス

術をわたりし一露しりた  
おまきホ方しりた

咽を豫念海をいふは老和當乃  
如神なりと云ひしは病は能く  
此海をかりて苦痛生る事十條の  
海をかりて今に世に  
海をかりて今に世に  
海をかりて今に世に  
海をかりて今に世に



と昔も中へはくるとさしてきてる記号  
うちかいていふさまがまうあれいさういそま  
張乃く〜いひや〜い〜北九の臥央共の  
事だかて始〜い事〜か〜い〜い〜い  
良知かまぬの〇もかめて療養のころもさ  
と〜して〜れなれ朝〜あ〜と〜を〜  
る家〜い〜の〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
宗三世乃其業を〜い〜い〜い〜い〜い  
流るれ他〜越て所瞻と〜い〜い〜い〜い

と誠心や通〜し〜る病字の急果〜い〜  
粥〜と〜進〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
人〜と〜家〜と〜始〜て〜心〜を〜長〜〜や〜あ〜れ〜と〜れ〜と〜あ〜れ〜  
畧〜と〜さ〜す〜じ〜く〜い〜て〜佛〜神〜乃〜擁護フクゴを〜た〜の〜し〜せ〜れ  
朝アサ者モノ比ヒ隊タビを〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
ひ〜も〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
〜い〜い〜い〜い〜い〜い



初めの脇を所行しうあこあやしくいあめ  
あひまうと次てあひまう一巻の歌はあつた  
折と尻尾のあひまうも使して

中実も植て松やまらまら下上朗  
世々と祈禱の始とておのく丹誠を拙て  
たる一巻のいひまうとあひまう山川かやまを障  
ちとて同輩乃誠信シニシ府合してわあひま  
はあひまうそ祈りかまらまらあひまうとあひま  
北野の聖廟にたてあひまうて伎法と祈りて奉る

此日病廢ニシヤク涙笑して春のあひまうにあひまの  
妻を唱へあひまうとあひまうとあひまうとあひま  
をいひまうとあひまうとあひまうとあひまうとあひま  
あひまうとあひまうとあひまうとあひまうとあひま  
あひまうとあひまうとあひまうとあひまうとあひま  
宗道カいひまうとあひまうとあひまうとあひま  
神下あひまうとあひまうとあひまうとあひま  
て四のう人同明白を信し解てあひまうとあひま  
あひまうとあひまうとあひまうとあひまうとあひま







かくふやうあし一とて舞とてしるをいへるは  
干憂もつて有よ画の川もか一物も狂見とて  
う侍をすこしとれあふちうく小園越  
そとちたてしつちあて病中のこころの  
たのしゆりあつたあて我もあふくふく  
う人の縁と郵一あふやと介りて感  
あふくあつたあて一日

二条お公より侍使御了るあふ病床を下て  
あふ侍とびかこころを奉り通のなす古又  
とありかうとたうあふあふあふあふあふ

えきら一とて一夫ゆふまらふひあふあふの  
朝なる大人誅すもとゆれくひをとして  
かめて若涯うそ習なる文基の直長あふも  
れ一絵も又其子あふあふあふあふあふ  
いとれもあふあふあふあふあふあふあふ  
百也一書をわける

よの宵知いひしきこころかしてはあふあふ  
民の舞うちもあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふあふ







清らうしつゝあつとやうに世の女おうして  
亦面ありしつゝあつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして

千尋し  
ツキヲ  
ウラフ

月と隔て今いふにあつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして  
あつとやうに世の女おうして

寅卯日二月由にそつとやうに世の女おうして

ミモイニエトニカクヒナサリ末ガヒツ  
コトアルトキニカンスニエトノシテイニロク



























貞は、どうして、何れも、是れを、清て、ら、めて、  
正は、ぬ、い、ふ、を、き、お、つ、く、を、な、ま、ぬ、を、た、  
た、と、く、人、靡、亦、く、再、せ、し、し、い、ら、ぬ、あ、き、い、ま、  
と、も、必、書、手、を、授、け、し、し、と、稱、を、く、い、ま、  
と、い、ふ、の、も、あ、り、い、ま、す、今、の、世、に、あ、り、し、  
し、る、と、之、作、の、福、を、遺、福、旅、泊、の、書、也、  
自、し、南、く、又、そ、く、ぬ、く、と、今、拾、ぬ、と、書、く、は、  
存、子、ん、い、い、集、ま、本、疎、く、人、の、身、よ、の、う、り、は、  
句、を、拾、い、し、う、く、い、れ、た、し、わ、く、し、を、同、上、の、た、  
か、く、せ、遺、事、一、行、し、も、と、免、を、細、々、よ、り、う、

く、か、く、ぬ、集、ま、て、ゆ、暇、室、の、遺、福、の、を、  
と、ら、し、あ、り、ぬ、僕、つ、あ、り、き、し、つ、な、れ、ん、  
尊、道、の、よ、に、う、く、校、正、し、あ、り、し、其、運、歌、の、  
遺、韻、文、事、年、代、の、記、名、十、今、し、い、ま、ぬ、る、  
あ、り、し、乃、そ、ぬ、あ、り、し、り、も、あ、り、し、  
し、と、い、ふ、や、

え、録、し、一、宣、を、  
風、國、謹、識

水、月、一、乃、序

輝、の、夕、ち、り、し、と、桂、花、枝、あ、上、  
心、を、る、蓮、の、島、に、あ、る、う、り、



井ノ田の里にぬき置候のりも  
をきかしてものいりあり深し  
横田川の水の面にお方の遠い  
き母とよきしとおもひも  
豆の田さきになのゆにあり  
思ふは入て三侯の里神  
をきかして候の里神  
の膳のやうす本らす  
古く小しこの  
今新入るる

くもぬり清り此  
つ穂ふりし  
豊ふそ  
とらのよき  
一のこ  
かたして  
たれいぬ月一  
面六  
田林

寛政二の九月 五朗







侍りたるを書林の一本子のゆいで  
世にひらき侍りたるを此の三老を  
既小設して林物存ちるを此の  
尾のの曉臺の曉の光の光の  
浴不身入へてくるとも羅加の  
ワの果らんじくくくくくくくく  
くるものあり推す所の月溪の流  
今も小のありぬ余鶴ととつて

いふや此流小添やてあやしの樓子  
のほのいふ老は女子に化して  
ことなる下戯れしやといへしあり  
眉ととらるるありしやいふの妖は  
あつたあつた子あつた醒りく  
やまの蚊帳に入て諸宿や  
とまふ二宿をともくめやして筆況  
まよとくくく再び一長日音仙の  
流の流の流の流の流の流の流の







おもしろく本因之屋の役万々を  
秘めながら書こころと字をいふ  
花子對してうらご樓の又鼓  
普茶の崩しの曙のやまひも  
巢の蜂の怒りやうと我ちて  
美人死するあをい羊取  
あさるうと墨の夜お世といひし  
伶の役もいとしとさうおよ

こゝに雪柳の節おぼろ透  
狸の領とちりし貴家  
さるくのみ人の情をいふ目して  
我の七首と神もいけすや  
これやいふ今いふおの古思  
おろのそゑも地飽七島  
そはふ其あの大い流  
こころいふよ院茶の家



襪の行はくしぬの〜櫃子

こととをふたくて憎よあ者

つれ漸し二の瀬は高よ見ゆ

芦荻とりて炬火小次

米を石余りて花小井も能

家くし山河よ縁深ふも能

えのふよ春よし

月の日やふよふかよ

入りに快やしく東あ者操

青芭蕉

おぬよ鳥の寤寐はある音 月夜

江の楓く水ら井深くあふこ 儿董

所はよ道ははたき 杖は凡 曉臺

米田近地白くことそらるる 鈴る 濱

剛敏むせり 配る 辰は 葎

足利のあふり さまよ 毛 葎

ワうがよき 恋よ さまよ あり 葎

影起よ ひと けり 葎



より居さるゝの糸の糸も  
傘工の傘干にやめり  
野とあはれをきてし  
おゆるしてさまじく  
二なめのすまの殿の  
月明てなると国のみ  
旅はやくとふ人  
君えのさりとる土佐泊

入ればあまの雨ちりり  
矢軍小骨奴此石とめけ  
泥と蹴あけの使ぬ  
祐天の素ちとさる果  
まるとひの扇のちも  
放下の娘みやい  
七つり上飛鐘やはあ



鳥も木も花も吹まらるん  
目の前も物盗去る非人  
二階の裸も笑ひか  
追善し清るうらりも  
本津いも綿めと  
杖も大炊も匂下り  
穀香うてくも茶倉末をた  
創殺し核の女年あふと

深きまをこころの  
花とを藤のこころの  
舞いあはらる琵琶借り

共こ

月夜

あそぶる  
田中の松も虫  
簾接し  
水風呂ぬるう  
皆囃いぐる  
此董

暖亭

青苗



張鏡の鳥衣の濕りけかし  
惜一處一雷のあし  
木窓のあふきこよるあはれ  
娘のこも糸のひととちし  
方あくの羅おし  
新渡舟の錢きよ月  
待合の舟の石よ  
かあし眼鏡のけし

灌頂と大の坊の物  
みくれよの菜の香るよ  
小舟の舟の舟の舟  
後でよの自利き  
死してよの其の舟  
りあてりよの舟  
初てよの舟  
よすれよの舟



鶏の姿尾さび〜〜  
〜〜入札のり又  
築山女上三線羽子小形  
云々の唄の今ぬけつよ  
口切は渡屋の風をちのめし  
〜〜子のまうも子どろ  
逝はよのかくのこまら最と川  
鬼と成君の詠と糸よ秋

かこしらのまうと嫁よねの  
泣び〜〜家の中の半部  
甲ののはあ〜〜  
文珠とよの器の所  
修の油あやまら〜の暮  
小石少飯の風折を  
それ打て加鳥のさきり  
春田なりと炉の埋火



苦哉名利人  
樂矣乞兒身

儿輩

乾 乾 利のあやうきなり  
世 裸々のややあやうきなり  
物 倉のあやうきなり  
小 松のすきやうきなり  
あ つまむの市のさう麻帆  
歌 子のさう水子松子  
ころくと板間へ持る古鼓

踏 音のほと神と  
藤 竹のさうさう  
松 よ運と板と  
玉 緒のさう入懐のさう包  
雨 暗しとゆらみ  
き 一羽のさう大串のさう  
乃 乃のさうあやうき  
懐 の鏡のさう  
伊 廟のさう







砂川の流は天沙びし一塵  
は次ふぬくもいふの春

ぬくは白

騏六尾張の活酒の人や  
はまありをふらひの春は死し

あまや世はかたれ春の春 騏六

ちりきりかたれもいふて旅装束

入るまに中くふりく丹波路らう播

磨くも花猿とあると枇杷園

離鶴とすめてし 士詞

須度比賣の山は水とあく猿とて 騏六

月のつぎ(ま)は(ま)部(ま)なり 羅城

たのまのまをみらぬ柏 端子

果ももつくるはまをこし(ま) 白園

酒のまよるはあかま(ま) 白園

くおりまのら(ま)し(ま)り 白園

この後りつ(ま)る(ま)は(ま) 白園

秋(ま)は(ま)あ(ま)か(ま)る(ま) 白園

わ(ま)お(ま)人(ま)陽(ま)を(ま)る(ま)は(ま) 白園

六郎子



妹のよぶ川一平汁と考ふる  
さきさくあれはあまふりよきて  
我こそもこもり一魚のあゝあゝと  
あわれと誰いおれ一照りごと  
さる園をゆつてさるくこひるる  
鴨川のたもとにさるあしや  
とくれさるくさるあゝする  
戯てさあのをとほかにし  
シ々のさるあゝ一床新なるし

青 白 子 城 六 朗 園 青 城

余りして雨の七筋のほろろ  
凡そさくねのさるさる  
細豆とまへいたはれを漢く  
一軍と語一人とあそく  
おきさるくさるあゝ丹  
ゆのたさるくさるあゝ  
さるい建しやるとさるあゝ  
おれとくさるくと丹さるあゝ  
百餘の日のさるあゝ

外 央 閨 充 六 朗 子 城 青 白 充



朝長川一河ふりて  
 日くもたぬとさうるの影を  
 伊豆子影のさんらん  
 赤ととも持櫃とくし  
 赤の影あよるる  
 寂る人さのぬさびりて  
 日女物でしあのおれ垣  
 上とちりるは廊のそのま  
 千鶴さうもこちり  
 中央 白 城 示 朝 央

松の葉序  
 士朝

大の、詩を不用意とて  
 赤れとさうる今まは果てくこ  
 白赤編ぬは赤のあま  
 赤くもたぬとさうるの影を  
 赤の影あよるる  
 赤ととも持櫃とくし  
 赤の影あよるる  
 寂る人さのぬさびりて  
 日女物でしあのおれ垣  
 上とちりるは廊のそのま  
 千鶴さうもこちり







